

四月七日、舞鶴港に到着、DDTを散布してもらい、旧海軍の兵舎に二日間、いろいろの手続で滞在し、三百円頂戴し、故郷に帰ることができました。

我が家は前年火災で全焼しており、掘って建て小屋で生活していたが、家族一同の努力と知人の協力により、二十五年には新築いたしました。その後何事も順調に進み、姉妹五人も市内に嫁ぎ、私も結婚し、二人の男子に恵まれ、家内と共に健康で今日に至っております。

コムソモリスクでの抑留生活

北海道 菊地 常夫

大正六年一月、北海道十勝郡大津村で出生。地元の小学校高等科卒業後、家業の農畜産を手伝い、祖父母、両親、七人兄弟妹の長男で、家計を支え、入隊まで青年学校に進んだ。

昭和十三年三月、関東軍独立守備第二十三大隊第三中隊（満州三江省勃利）に現役入隊、乗馬兵と共に蹄

鉄工となった。同十五年一月、獣医務下士官候補として関東軍軍馬防疫廠で集合教育。同年六月、牡丹江省拉古の第二補充馬廠に出向。同年十二月、転属。馬管理のため翌年三月まで遼陽駐在。同十六年七月、第二野戦補充馬廠本部付。同年八月、獣医務軍曹に昇進。同二十年八月現在、軍馬一千七百頭、自活用の豚百頭、肉牛十頭、鶏二百羽等を飼養し、日本人のほか、韓国人、蒙古人の軍属が管理に当たった。

八月九日、東寧方向からソ連軍侵攻の報で、所属部隊は吉林省敦化に後退するため拉古から貨車で移動、乗馬と輜重車のための装備で、飼養中の大半の軍馬、自活用家畜は放逐した。

横道河子付近でソ連軍の銃撃を受け、馬一頭を失ったが、身の危険を感じ、日中は森林内に退避しつつ行動した。八月十七日、ソ連軍の侵攻は終息したらしいが、十九日、馬連河で武装解除の上、強制収容された。収容所では携行した食糧で不自由しなかったが、移動中の悪水でアメーバ赤痢に罹り連続下痢に悩まされ、衰弱甚だしく歩行不能となり、輜重車両上で移動させ

られた。

九月十二日、牡丹江省愛河でソ連の貨車に詰め込まれ、綏芬河を経てソ連領に連行された。同月末、コムソモリスクの第一收容所に抑留され、倉庫状の大型板張りの建物の二段ベッドで起居した。当初の抑留人数は一千人程度であったが、最多時には五千人にもなった。

同年十一月末、百五十人ほどの作業隊に組み込まれ、建設と煉瓦用の粘土採取作業に従事させられた。過重なノルマを免れるため建設基礎工事では手抜き作業をしたが、恩恵も処罰も受けなかった。発疹チフスは発生しなかったが、シラミには悩まされ、煉瓦工場の釜で衣服を煮て退治し、当初たらい一杯の湯で身を洗ったが、その後入浴できた。

收容所の管理方法は判明しないが、労働に耐えられぬ者には、軽作業に回され休日もあった。衣服のうち下着はソ連製のもので、防寒具は日本軍のものが支給された。食糧は雑穀が主で、塩蔵羊肉・魚、凍結馬鈴薯が与えられたが、量は少なく、不足分は雑草で補った。

た。

抑留一カ月後に洗脳教育が行われた。移動後はなかったが、日本人同士の吊るし上げはあった。

二十二年十月末、帰還するまでの二年二カ月間、生への執念を高め、劣悪な環境に耐えるため全力を尽くしたが、アメーバ赤痢再発し、入院加療し事なきを得て十一月九日、函館に上陸、復員した。

二十三年二月から大津村浦幌町役場に勤め、四十九年から五十四年まで浦幌町の林業会社に再就職。五十八年四月まで浦幌町嘱託となり、同年五月退職、札幌に移住し現在に至っており、全抑協北海道支部役員をやっている。

ハバロフスクでの苦闘

北海道 太田 隆夫

大正十三年九月、北海道美唄市で農協職員の子、五ヘクタールの田畑耕作の母との間に四男三女の長男と